

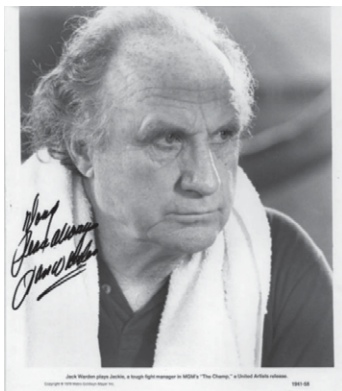
バックアウト・ムービーズ 私をKOで打ちのめした映画

Round 2

～名優ジャック・ウォーデンのヨーロッパ～

目深な野球帽、サンタさんのようなひげもじゃで、ジーンズに杖をついたおじいさん。杖の音と共に近づいてくる鋭い眼光が私を撃ち抜く。目前まで来た時「Mr. Jack Warden! Hello!」と私。

78才のジャック・ウォーデンは、わかるはずのない正体が見破られたことにとても驚いた。1998年5月、晴れ渡ったマーストリヒト(ドイツ、ベルギーとの国境に近いオランダ南部)でのことである。



ボクシングコーチ役の『チャンプ』(1979)
自筆のサインには「Peace Always 平和が一番」

ニュージャージー生まれの彼はモハメド・アリの故郷、ケンタッキー州レイヴルで貧しい幼少時代を送る。学校中退、職を転々とし、プロボクサーを経て兵役に。18才から3年間は中国・揚子江のパトロール船。ノルマンディー上陸作戦では多くの親友が息絶えた。作戦に参加するはずだったジャックは、その数日前、イギリスでのパラシュート落下の際、足に1年間入院の重傷を負い、退院後もナチスとの激戦地バルジへ。入院中にクリフォード・オデッツの本を読んだのがきっかけで、役者の道に転向。

その虎のような目には、18才だった1939年の3月から6月まで4連敗を喫しても、あきらめなかったボクサーとしての強い意志が、瞳の奥には戦争で仲間を失った深い悲しみがただよう。皮肉なことに戦った敵国ドイツは彼自身のルーツである。人は元々は同じ大陸から来た一族なのに、国の策略にまんまとかかり、排他主義に墮落し、自ら家族に銃を向けるのは世界の日常茶飯事。

C. ゲーブル、G. クーパー、S. ローレン、D. ホフマン、A. パチーノ...ジャックは百本を超える作品に出演し、彼が共演したスターは数知れない。主役の人間性をより高めるのがジャックのマジック。『12人の怒れる男』で演じた社会意識ゼロの男役は、一般人を象徴するはまり役。

木漏れ日のカフェの人たち、散歩中のワンちゃん、大道芸人の間を抜けて歩くジャックは幸せそう。53年前の24才の一兵士にとっては信じがたいだろう...大殺戮地にこんな平和が来るなんて。生き残った兵隊が、愛に溢れる『フランダーズの犬』



(1999)のおじいさん役で、仲間の血がしみ込んだヨーロッパの土を踏み奇跡。『フランダーズの犬』の翌年の映画が遺作となった。

人間には人生が出る。
深ければ深いし、浅ければ浅い。

穏やかな日差しの街角で、ポール・ニューマンやスターローンのことを話すと、55年前、人生を変えた足を杖で支えながら「ホワッハッハッハ!」と大声で笑う陽気な元ボクサーは、まさに『天国から来たチャンピオン』(アカデミー男優賞候補作)。かつて国境を争わされ、今や心から国境が消え去ったジャックはさわやか。

解放とは政府だの協定だのがするものじゃない。心がするもの。

PS. マーストリヒトもゴータもデルフトも古く落ち着いて素晴らしい。中世ヨーロッパがそこら中にあるオランダで、近代的なビルや工場が立ち並ぶロッテルダムだけは面白くない。

この街は、第二次大戦で壊滅し、工業・貿易都市として蘇った。

美しいものは失って。



▲『フランダーズの犬』(1999)

(Lucky Day)